

## 食用蛙の副業的價值

北海道大學農學部 農學博士 犬飼 哲男

食用蛙の吾が國に於ける飼育は大正六年に米國よりブルフロツダ廿四番を輸入せることに始まり、これが吾が國の風土に適否に就いて試験された。當時より既に民間に於てはこの蛙の價值に就いて著しき宣傳あり、農家の副業的飼育價值に就いて世人の注意を惹起した。

その後二三の動物學者の熱心なる研究により兎に角吾が國に飼育可能性は確實にされた。然るに爾來十二ヶ年の試験年月を経て來たに拘らず、今日でも眞にこれを副業として獎勵すべきか否かは未だ決定されて居ないのみならず、その價值は未だに甚だ過重視されて居ることは遺憾である。元來此の種の副業獎勵には經濟調査が不完全であるから、此の食用蛙の場合も、經濟狀態の逼迫から遷れんとして農家は今日迄既に多大の犠牲を拂つた。全國の農家の損失の總計は莫大であるが、世間は尙誇大なる宣傳を信じ、官廳方面も尙飼育試験を獎勵しつゝあるから今日は最早こゝに斷然結論を下さなければならない。食用蛙の飼育の不利な點を列舉すれば

### 一、飼育管理上の不利。

食用蛙の産卵は吾が國では五月下旬から七月（北海道は八月）に亘り孵化した蝌蚪はその年に變態することなくそのまゝ越冬するから吾が國で水田を利用して飼育することは不可能である。變態後でも完全なる親蛙に達する迄に更

に二ヶ年を要し、この蛙は蝌蚪の雜食性なるに反し、悉く生きた小動物のみを食ふ故に飼育甚だ困難である。普通の野生のアカガヘルでさへ一ヶ年に六百以上のイナゴ大の昆蟲を食ふから食用蛙の管理は農家の副業としては適しない。その上蛙は地下等より易く逃走する恐があるからこれがため一坪少くとも四圓の設備を施さなくてはならない。

## 二、市場の價値の少きこと。

生産された蛙は目下東京では一人前四拾錢の料理で、一匹分八拾錢としてもその原價は更に安く、鶏の二倍以上の管理で價は鶏の半額である。若し料理されしが眞の食用蛙でないことすればこれ反つて食用蛙の恐る可き將來の市場の敵でその價値は益々減する。次に今日では食用蛙とても僅かに美食家の好奇心を啖る丈で一般の需用にはならない。市場價の高い程この傾向は著しくなるばかりである。

## 三、外國輸出の望み難いこと。

米國に於ける今日の食用蛙の需用を見るに少くとも東部ではその料理を探すことさへ困難である。然るに約三千年前迄はまだ野生にブルフログを多量に産し需用も相當にあつた相であるが、今は野生のものも少く五六年前に實際に飼育した者も管理困難で中止した者が多い。又目下有望なる事業として宣傳されてゐるものゝ目的は第一に種用として日本向輸出に適し一番百圓以上に賣れること。第二に日本は牧畜業が貧弱なる故食用蛙の需用は將來日本人の食机から絶われないこと云ふ様な意見を發表してゐる状態であるから逆に米國へ輸出することは望み得ない。尙支那、佛蘭西等へ輸出することも經濟上から更に考へられない。

以上の諸點から考察して食用蛙の飼育は吾が國で農家の一般副業として奨励すべきものでないと思ふ。養魚に適しな

い池沼、蓮池等の利用の外此事業は今日のまゝ極めて生産を制限してゐる時のみ價值を有するものである。(二五九七)

## 花粉母細胞分裂の無色期に就いて

宮崎高等農林學校教授 井 上 重 陽

著者は嚮に亞麻屬に於て花粉母細胞内の核系が發育して染色體となる途中で殆んど無色となる時期を見出したが、今回の研究に依れば斯かる現象は獨り亞麻屬ばかりでなく尙ほ他の多くの植物に於ても之を認める事が出来る。

今大麥の花粉母細胞の分裂の模様を検するに、核系はバケテーン (pachytene) 時代に近づくに従つて次第に染色質を得て濃く太くなるが、バケテーン時代を過ぎるに反對に次第に染色質を失つて遂に殆んど無色となつて終ふ。著者は此時代を無色期 (Achromatic stage) と名づける。

無色期を過ぎるに再び染色質が核系の上に現れ始めるが、それと相前後して核系が二本つづに分れはじめる。即ちこれはダイプロテーン (Diplotene) 時代の始めである。更らに分裂が進めば核系は益々濃く太くなるに共に互に拗れて遂にストレプジテーン (Streptotene) 時代となる。次いでデアキネシス (Diakinesis) 時代を経て第一メタフェース (Ist metaphase) に至れば double の七組の染色體が出来る。

更に百合の花粉母細胞の分裂の模様を検するに、大麥と同様にバケテーン時代の終りに於て核系が染色質を失つて遂に殆んど無色となるのを認める事が出来る。而して無色期以後に於て再び染色質が核系の上に現れ、同時に核系が二本